
焼きすぎた男

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼きすぎた男

【Nコード】

N5050G

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

三十代半ばをゆく仮面二トの田場は、どういうわけか他人の世話をする事が好きで、ボランティアなどには積極的に参加していた。それ故、町内会のお年寄りからは慕われる一方であった。元々、樂觀的な性格なのもあって、定職についていなくても、自分の思うように事が進んでいるかのように見えたとある日の午後、田場は思いがけない事を気付かされる事になる。

仮面二丁の田場は、ただ単に人を助けるのが得意であると自負していた。田場は三十代半ばで、普段はアルバイトとちよつとしたネット副業で生計を立てている。両親とは仲があまり良くないため、実家からそう遠くない所にアパートを借りて一人暮らしをしている。同世代の人達は齷齪と精を出して働いているというのに、彼は自由気儘にマイペースを保ち続けながら一日一日を過ごしていた。しかし、田場は自身を不幸な境遇に陥っているとは思っていなかった。元来、楽観的な性格なのも手伝っていたが、むしろ、町内会等のボランティアには積極的に参加するので、顔馴染みの近所のお爺さんなどからは喜ばれていた。

「今度の週末の土曜日、サルビアのなえ植えがあるんじゃない。ぜひとも田場さんにも来てほしいのお」

「ええ。喜んで参加させてもらいますよ」

「ほお、そりゃよかった。まだ全然若いし、力になるわい」

と言いながら、町内会を仕切る老翁は、にっこりと安堵とも言える微笑「えみ」を頬に浮かべ、彼を頼りにしている様子が窺われた。田場は、二十歳を過ぎてから警備会社に三年弱くらい勤務していた事があったが、仕事の内容に興味が持てず人間関係も思わしくなく、結局辞める事を決意してしまった。それ以後数年間、幾つかのアルバイトを繰り返しながら生活し、今も無気力な現在に至っている。

「そりゃあ一時、自分は恵まれていないんだと思つた時期もあったけどさ。でも、今じゃそんな関係ないよ。何不自由なく生活できてるんだし」

彼は、仲間の若年フリーターにもこんなふうに鷹揚に話す。田場の楽観的な性格の一面が、ここでも窺えるのであった。

さて、彼はといえば、家の掃除から炊事、ペットの世話、草むし

り、さては日曜大工まで何でも、近所の人達の世話を焼かずにはいられないのであった。「なんでも屋でも開こうかな」

と、ふと、いつもの即席ラーメンを食べながら冗談雑じりに自身に言ってみせたりする。そうした時、田場の表情「かお」は、卑猥な出来事を見聞きしたときのように嬉しそうにニヤつくのであった。がしかし、そんな田場にみんなが好意を持っているわけではなかった。同年代の彼を知っている人は“社会で使えない世話好き野郎”とけなし、相手にしていなかった。田場の良くないところは、別に他人がそれほど手助けしてもらいたくないことにまで、手を出さずにはいられない事であった。“余計なお節介野郎”とも陰で言われている事に、彼は気付いていなかった。田場自身がそこまでして何故、人の面倒を見たがるようになったのか、自分でも理解「わか」らなかつたのである。

(いったい、いつから俺は)

早朝、鮮魚市場で汗水流して働いている時も、部屋で一人寛いでいる時も、そうなつてしまった理由がわからなかった。

(… だって、俺は今気楽で幸せじゃん。だから困っている人を助けても別におかしくないんだよな)

考え込んだ揚げ句の答えは、樂觀的な彼らしいものであった。

とある日の午後、町内会のボランティアで住宅街のゴミ拾いに参加していた時、顔見知りの小母「おば」ちゃんからこんな事を言われた。

「あんだねえ、周りの世話色々と進んでしてくれるのは構わないんだけど、その時々によつて不快に感じる人もいるんだよ。有難迷惑もほどほどにねえ」

(うるせーんだよ、ババア…)

思春期のちよつとした事で親に歯向かう生徒のように、即座に反抗する気持ちは田場の心頭に沸々と涌いてきた。話してくれたことが飲み込めなかつた訳ではない。ただ、どうしても田場は、その中年の女の忠告に素直に耳を傾ける事が出来なかつた。

(ボランティアは好きで参加しているのにさ)

「じゃあ、俺がやらなきゃこんなボランティアに、自ら進んで足を運んでくれる人他にたくさんいるのかい」

「いや、そういうわけじゃないけどさ、ただ…」

また小母ちゃんは、愚痴愚痴と彼の耳に逆らう事を喋り出す。

(だからさあ…)

直ぐさま田場は、口喧しいこの中年の女に反駁しようとしたが、その時ふと、今まで思いもしなかった別の考えが彼の脳裏をすーつと過ぎった。

(俺は本当に人助けをしたいために、此処に来ているのか ただの自己満足なだけじゃないのか…)

それから数日後、いつものように深夜コンビニで睡魔と闘いながら働いている時、最近新しく入ってきた年下の仕事仲間からこんなことを言われた。

「田場さん。丁寧に教えてくれるのは嬉しいのですが、あれこれ詰め込まれると逆に訳わかんなくなっちゃいます」

(……はっ、そうだったのか！)

田場は急に何かを悟ったように、その場で茫然と立ち尽くした。

(何もかも人を助けてやる事で他人も自分も幸せになれるなんて、俺の単なる思い込みじゃないか…)

「そうか、ごめんな。俺が少し馬鹿だった」

「い、いえ。そんなことないですよ」

田場はそれ以来、近所の人達の世話を焼く事も、ボランティアに進んで参加する事もあまりしなくなっていた。

諦めの表情に雑々じって、田場はくすつと苦笑いをした。これからはもう、今が気楽で幸せだなんて、思うんじゃないと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5050g/>

焼きすぎた男

2010年10月28日08時55分発行